日本年金機構理事長賞　徳島県　田村 未来 様（高校生　女性）

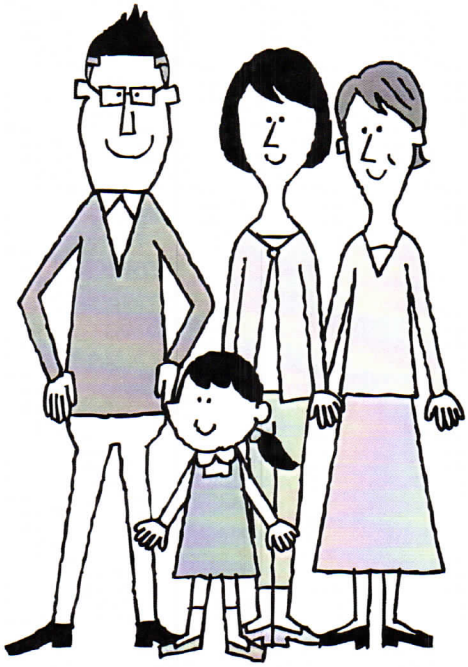
ものごころがついた時には、父はすでにこの世にいなかった。父が亡くなったのは、私がまだ二歳だった頃である。突然の心臓まひにより二十七歳という若さで、一家の大黒柱だった父は、母と私を残してこの世を去った。あれからもう十五年が経つが、今まで生活に不自由したことはない。母が仕事で家を空けても、祖父母が面倒を見てくれていたし、バレー、ピアノ、塾と自分のやりたいことはやらせてくれた。おまけにたくさん家族旅行にも連れて行ってくれた。そんな母の姿を見てきた私は、なるべく迷惑をかけないように、習い事は最後までして、勉強も必死に頑張り行きたい高校に受かることができた。でも今究極の選択に迫られている。

それは、大学進学か、就職だ。私の通う高校は県内でも有名な商業高校で、生徒の半分が高校卒業後に就職している。もちろん私も最初は県内の企業に就職するつもりだった。でも先輩の話を聞いているうちに、県外に進学することが目標になっていた。その話を母にした時驚いた顔をしたが、

「あんたのしたいようにしなさい」

と笑顔で言ってくれた。がしかし、県外のしかも私立の大学となると、奨学金を使うにしてもとてつもない費用がかかる。母は「お金のことは心配せられんよ」と言っていたが、本当は無理をしているんじゃないかと、頭の中はそのことでいっぱいだった。

そんな時に知ったのが遺族年金についてだった。年金といえば、老後を支えるものだとばかり思っていたため、遺族年金と言われてもいまいちぴんと来なかった。今回このエッセイを書くにあたって遺族年金について詳しく調べてみると、父が大いに関わっていることがわかった。父がまだ生きていた頃、こつこつ働いていたお金が、遺族年金として私たちのもとに支給されるのだ。今まで母が女手一人で私を育ててくれていたと思っていたが、その陰にはちゃんと父の存在があった。そのことを知った時、私は少し嬉しくなった。姿こそないものの、父は遺族年金という形で、私たちを支えてくれていたのだ。それと同時に、こんなすばらしい制度を作ってくれた、日本に感謝しようと思った。

私は今、進学に向けて勉強を必死にがんばっている。夜遅くまである部活や、朝からの補習で心も体もくたくただが、応援してくれている母や、家族のために

がんばろうと決めた。もし、今回このエッセイを書く機会がなければ私は遺族年金のことについて知らないまま過ごしてきたかもしれない。年金についてまったく知らないまま過ごしてきたかもしれない。いつ訪れるかわからない死を想定して年金を納めることはとても大切なことがわかった。父はもうこの世には居ないが、遺族年金という形で支えてくれている。そう思うと私は安心した。もし父にこの声が届くならこう伝えたい。「パパ、あなたのおかげで私はここにいます。ありがとう。」と。